私のテーマ

史実と創作の間で 薩長同盟を叫ぶ。

兵庫龍馬会　会長
東京幕末GARAGE
楠本　剛

龍馬ファン歴40年

「あなたにとって坂本龍馬はどんな存在ですか？」
「坂本龍馬の魅力はどんなところですか？」

このような質問に、「出会いの達人」「先見の明を持った人」「常識にとらわれない思考性」等、明確に答えられる人を心から尊敬する。

私は悩む。およそ40年、坂本龍馬を敬愛し、いつしか彼の年齢も追い越しつつ…、先ほどの様な質問を投げられたら、「ん～、…たぶん日によって変わります。」と、なってしまう。

おおよそ歴史の人物や事象に関心を持った場合、その探究心から書物を読み、専門家の講演を聴き、より多くの史実を追求、または博物館で一次資料を見たり、さらにゆかりの地に赴き、当時に想いを馳せるという行動になる。

私の龍馬像を創作へ

その一方で、史実にない部分、空白の部分を見つけ、そこを膨らませる、または違う流れの同時期に起こった史実との関連性を想定するという楽しみ方がある。私の場合、これである。以来、イラスト・紙芝居・劇団・朗読劇という手法で自分なりの龍馬像を形づくってきた。

龍馬さんの生涯は史実、フィクションとを取り混ぜ、起承転結のテンプレートとして出来上がっている。

・小さい頃から母親代わりの豪快な姉に育てられ、気弱な性格の少年は剣術の上達で、自分に自信を持つようになる。
・青年になり、藩命で江戸に行き、黒船に遭遇、衝撃を受け、自身の使命を考える。
・脱藩を決意、家族と故郷に別れを告げ、志と夢を見据えて生きる。
・運命の師匠との出会い、国を動かす政治活動の一端を担う。
・身分や藩の立場をこえた多くの人物と、時には共感、時には駆け引きしながら結果を出していく。
・目指したものが結実したと同時に、非業の死を遂げる。

この流れを汲み取りつつ、いかなる龍馬さんの物語を組み立てるか。

物語化の難しさと楽しさ

限られた時間の中で生涯全ての流れを語ることは難しく、ある一時期の出来事をピックアップし、その前後の時系列の中での起承転結を考える。

次に、芝居の中に龍馬さんを登場させる時、どのような人物像を前面に出した「主役」にするか？を想定する。これを軸に台本を書き進めると、龍馬さんは実にいろんな事を語り、意外な方向に動き始める。さて、その発言や行動を裏付けるものは史実の中にあるか？と、様々な文献に目を通す。おおよそこの段階で、今作った台本が物語の展開として「有りか？・無しか？」が決まる。

また、自分としては面白いなと思う筋書きも、演ずる能力を顧みて、「これはうまくいかないな…。」という結論に到る事も多い。それは、（多少大げさに言えば）観客となるであろう多くの方々の龍馬のイメージと、自分の今のスキルで表現できうる龍馬のイメージのせめぎ合いでもある。

そのせめぎ合いのバランスも紙芝居と朗読劇で変わってくる。まず、紙芝居の場合、一枚の絵で、どれだけの話の進展を盛り込めるか、が重要となる。たとえば、薩長同盟締結の場面。左右に西郷さんと木戸さんが対面して座し、中央に龍馬さんが座る。この場面の出だしは、まだいがみ合っている西郷さん木戸さんに龍馬さんが檄を飛ばしているが、後半は一転、三者が手を携えて穏やかになるシーンとする。一枚の絵で三人の表情は、激しさと穏やかさの両方を醸し出すものにし、読み手の語りで、三者の表情が変わっていくようにイメージできることを狙う。これが難しい。

朗読劇の場合は当然、絵は無い。もっぱら三者の顔も観客それぞれのイメージに合った人物（ドラマや映画で見た役者の顔を思い浮かべてるかも）を想像していただきながらのご鑑賞となる。読み手の声に乗せる感情と情景描写を語るナレーション、そして台詞の後の間で全ての世界を形作る訳で、説得力のある声の役者としてのスキルが問われるが、そこは龍馬さんがいつもあの手この手で助けてくれるような気がしている。

記念館・近江屋での紙芝居＝令和元年11月15日

これからも龍馬さんの世界を皆さんと一緒に楽しみ、そして龍馬さんの魅力を広げていけるように活動していくことを目指しているものの、まだまだ龍馬さんの魅力について、「これ！」と一本に絞りきれない日が続くであろう。

朗読劇中の筆者

「拝啓　龍馬殿」　龍馬と私

千葉大学医学部医学科4年　西内　茉澄

「お久しぶりです。我慢できなくなって、またこの場所に来てしまいました。」

私の坂本龍馬への手紙は、大体いつもこの言葉で始まる。坂本龍馬記念館の同じ席で、この手紙を今まで何回書いたことだろう。

初めて龍馬に手紙を書いたのは、9年前のことだった。

龍馬との出会い

小学生の頃、私は歴史上の偉人の中で龍馬が一番嫌いだった。

日本で一番有名な偉人と言っても過言ではない龍馬。なぜそんなに有名で、人気があるのか全く分からなかった。その頃放送されていた大河ドラマ「龍馬伝」は一話も見ることなく、世間で巻き起こる龍馬ブームを冷めた目で見ていた。

そんな私に大きな転機が訪れたのは、2012年1月3日。私の人生を変える、一冊の本と出会った。中学1年生の正月最終日、やることもなくふらりと近所の本屋に立ち寄った。そこで真っ先に目に入った本は、司馬遼太郎氏の『竜馬がゆく』。

世間の龍馬ブームに乗じて、目立つところに置いてあったのだろう。パラパラとページを繰る。長いなあと思いつつ、歴史上で一番嫌いな人物の小説を読んでみるのも面白いと思い、試しに読んでみることにした。初めはふぅんと斜め読みしていたものの、途中から本を読む手が止まらなくなっていた。坂本龍馬ってなんて人だ。たった150年前の日本に、こんなとんでもない人がいたのか。気付けば私は龍馬に心酔し、頭の中は龍馬で一杯になっていた。

不思議なことに、『竜馬がゆく』を読み進めるにつれ、どこか違和感を感じるようになった。私はこの本を読みながら、気づかぬうちに自分の中で独自の龍馬像を創り上げていたらしい。自分の中にあった今までの龍馬像と、司馬遼太郎氏が描いた竜馬像に齟齬が生じたことが、違和感の原因だった。私の中で、本当の龍馬を知りたいという思いがどんどん強くなっていった。そのために、日本で一番龍馬に近い場所である坂本龍馬記念館と桂浜に行きたいと強く思った。その念願が叶い、同年の3月に初めて高知を訪れた。

初めて桂浜と龍馬記念館を訪れた時の感動は忘れもしない。その日はあいにくの雨だったが、それが独特の雰囲気を醸し出していた。荒れ狂う波。激しい波の音。だがそこには、大きな乳白色のベールに包まれているような優しさがあった。私は確信した。ここに龍馬はいる、と。私は溢れ出る思いを抑えられず、「拝啓　龍馬殿」を思うがままに書いた。

「第1回子ども龍馬フォーラム」リーダーとして

それからというもの、龍馬は常に私の心の中にいる存在となった。薄っぺらい言い方をすれば、人生の師匠とでも言うべきものだろうか。日々龍馬のことを考えながら、私は日々を送っていた。

そんなある日、突然坂本龍馬記念館から電話がかかってきた。「第1回子ども龍馬フォーラム」への参加と、そのリーダーを私が務めるという内容だった。私が龍馬に宛てた「拝啓　龍馬殿」が面白い、ということで呼んでいただけたらしい。ただの龍馬ファンの中学生が坂本龍馬記念館のフォーラムに参加するなど、身に余る光栄だがとんでもないことである。務められる自信はなかったが、精一杯やってみようと思い参加した。

そこで出会った坂本龍馬記念館の館長やスタッフの皆様は、熱い思いをお持ちで、龍馬の片鱗を感じさせる素敵な方々だった。子ども龍馬フォーラムをきっかけに、今まで私は言葉にできないほどお世話になっている。坂本龍馬記念館の方々に出会えたことは、私の一生の宝物である。

「第１回子ども龍馬フォーラム」で発表した
中学３年の夏＝2013年８月15日

龍馬と医学生の私

龍馬に出会って間もない頃、私の夢は歴史学者になることだった。大好きな龍馬のことを研究し、

深く知りたいと思っていた。しかし、自分の中で龍馬像が形成され、龍馬が確固たる存在になるにつれ、今まで感じたことのない感情が芽生えた。それは熱くて、身体中の血が湧きたち、いてもたってもいられなくなる衝動。身体に力がみなぎり、意志が溢れてくる、でも胸が締め付けられるような感覚。龍馬に触れるたび、その感情が生まれるようになった。

初めは何か分からなかったが、やがて自分の中で答えが分かった。私は、自分の手で日本を変えたいのだ。何をどう変えれば良いのかは分からない。具体的な手段も分からない。でも龍馬のように、幕末の志士達のように、真剣に自分達の将来のこと、国のことを考え、少しでも日本の将来を明るくしたい。龍馬に出会ってこんな思いが生まれ、それは9年経った今も変わらず私の心で静かに燃えている。

だからこそ、私は官僚になりたいと思った。政治家の下で政策を提示する官僚は、政治家よりも龍馬に近い。初めは文系官僚になることを考えた。しかし私は元々医師という職業に興味があり、その選択に迷っていた。そんな時、医系技官という職業を知った。これは医師のみがなれる官僚で、日本の医療制度の根幹を定める職業だ。

この職業を知ったとき、私はこれしかないと思った。「小医は病を癒し、中医は人を癒し、大医は国を癒す」という諺がある。私は大医になりたいと思い、医師になることを決意した。結果として医学部に入ることができ、現在医師を目指しているが、変わらず龍馬はいつも心の中にいる。

神戸海軍操練所跡で＝2020年11月

コロナ禍と、夢と現実

2020年は、未曽有の年となった。新型コロナウイルス感染症により、今までの「当たり前」が、ものの1か月で崩れ去った。私も大学の授業が全てオンラインになり、友人とも全く会えない時期が長く続いた。将来への不安は募るばかりで、この1年間様々なことを考えざるを得なかった。

新型コロナウイルスが、世界中の人々に計り知れない苦痛を与えているのは言うまでもない。だがコロナウイルスは苦痛を与えただけでなく、各国の政治の闇を浮き彫りにした。日本でも、コロナウイルス感染症の対応とその過程で様々な問題が明るみに出た。そのような政治の現状を見るたびに、自分一人が政治に携わって何かを変えようと思っても、今の日本ではそれが出来る状態ではないのだと痛感し、失望した。

簡単に日本を変えたいと言っても、それが夢物語であることは今までも分かっているつもりだったが、コロナ禍で現実をまざまざと突き付けられた気がして、将来行政に携わるのはやめようと本気で考えた。

しかし、そんな時でも龍馬に触れると、あの衝動がよみがえってくる。私には何かを変えることは無理かもしれない、でも、どうしても、どうしても自分に出来ることをしたいと思ってしまうのだ。日本を変えたい、その衝動はどうやっても湧きあがってきてしまう。

今の時点で、私は何も行動を起こせていない。起こし方も分からないし、自信がないのだ。「これが正しい」と思っても、私はその事象の全体像を捉えられていないうえ、「私」という一方向からしか物事を見ていないからだ。メディアで「これが問題だ」と言われていても、その背景を知れば考えが変わるかもしれない。また自分の考えとは逆の意見を聞くと、そのような意見もあるのかと納得し、何が正解か分からなくなってしまう。

それを判断するためには、正しい知識と幅広い見聞が必要である。そのために、自分の専門分野でない様々な分野を学ぶことが、今の自分に必要な課題だと考えている。幅広い分野を学んだり、意見を取り入れたりすることは決して容易なことではないが、龍馬の柔軟性を見習って、しっかり学びたい。

これからも龍馬と共に

優しくて柔軟、類稀なる発想力と行動力、それを実行する勇気と自信。それでいて冷静かつしたたかな人たらし。龍馬の魅力を挙げたらきりがない。坂本龍馬という人物の存在は、年を経るごとに私の中で大きくなっている。これからも、龍馬と共に歩んでいきたい。

最後になりますが、私は現代龍馬学会員となり、このような原稿を執筆する機会に恵まれ、大変光栄に存じます。この機会をくださった坂本龍馬記念館・現代龍馬学会の皆様に心より感謝申しあげます。

試験合格を京都霊山・龍馬の墓前に報告＝2020年11月

こぼれ話 ― 犬歩棒当記（四十四）―

大笑いの研究

宮川 禎一

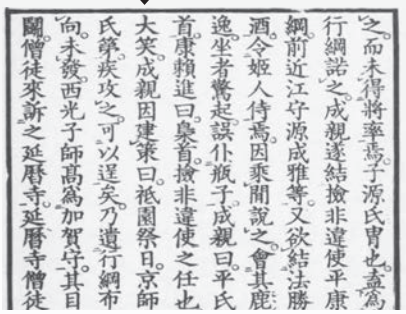
近年あらわれた龍馬の書状の話である。慶応二年十二月四日に土佐の家族へ出した長い手紙の原本の約四割が北海道で確認され、のちに所蔵者から高知県立坂本龍馬記念館に有難く寄贈された。

筆者はその手紙の中で慶応二年二月初旬に薩摩藩邸に収容された龍馬が小松帯刀・西郷吉之助らと寺田屋での遭難事件を総括して「皆大笑ニて～」と書いてある不思議さに「大怪我を負い、薩長交渉の中身まで幕府側に流出して、いったいどこが笑えるのか？」などと考察を重ねてきた。筆者の結論は「寺田屋で龍馬が襲われ、伏見奉行所に押収された龍馬の書状から薩長交渉の中身が流出・拡散（偶然であれ意図的であれ）して、薩長の関係がより緊密になったから良かったのだ。だからみんなで大笑いしたのだ」と考えている。それにしても「大笑」とは幕末にはあまり見かけない記述だし、龍馬らしい自由な表現だとも思っていた。

ところが最近まったく別の理由で頼山陽の『日本外史』を読んでいたら「大笑」の二文字が目に飛び込んできた。平安時代末の安元三（一一七七）年五月、平氏打倒の陰謀を後白河院の近臣らが企んだ「鹿ヶ谷の変」の話だ。首謀者は新大納言藤原成親。鹿ケ谷の山荘は僧俊寛のものだ。宴席中に瓶子が倒れて「平氏が倒れた」と囃す場面に「大笑」が出てくる。原文は「取瓶懸之柱上、一坐大笑」である。倒れた瓶を柱に懸けるとは瓶子（平氏）を獄門に掛けるという隠喩であり、その意味を察した一座の者が「大笑」したという記述だ。

『日本外史』の鹿ケ谷での「大笑」と龍馬が手紙に書いた薩摩藩邸での「大笑」はよく似ている気がする。後者もまた倒幕につながる謀議だからだ。日本史における「大笑」を充分調べたわけではないが、陰謀をめぐらす同志らが、その未来を予想し、さらにはその紐帯を確認するように「大笑」することはありそうだ。大きく笑ったという「事実」だけでなく、そういう「意味」までを含む文学的な表現だ。

まさか龍馬が『日本外史』のこの部分を読んでいたとかね…まさかね。


『校刻日本外史』より「鹿ケ谷の変」（部分）

“話してみるかよ”

「和霊神社の精霊話」

川村 貞夫（高知市議会議員）

「160 年ばあ前、若人 (わかいし) 二人が洋々とこの参道を駆け下って行った」。
和霊神社ご神木のヒノキの精霊が語りかける。
「確か 28 歳の若さやったと思うが、それにしても思い切ったものよのう」。
「それから 5 年後にその若人 (わかいし) は殺されてしもうた。」「無念よのう」。
和霊神社の参道に最も近いヒノキの大木は、龍馬の旅立ちを見届けていた。
そして、その様子を語りかける。

文久 2 年 3 月 24 日。雨がそぼ降る中、坂本龍馬は同志の澤村惣之丞を伴って土佐藩を脱藩した。係累に罪が下ることや、前年に同志の誓いを交わした土佐勤王党の恨みよりは、江戸にでも行けば新しい風に触れ、息苦しさも失せると見込んでの脱藩であったろう。閉塞感よりも行動を選んだ。先に脱藩した吉村虎太郎に続きたいと思ったかもしれない。

土佐には、自由がない。あるのは上士と下士の間にある身分差別である。たとえ、剣道場では実力で相手を負かすことができたとしても、悶々とする気分は晴れることがない。もっと自由で、誰もが幸せになれないものか。龍馬は多分に精神論者だ。静かに考えると、ますます鬱積した気分となる。

たいまつを手にした筆者（手前）と
ご神木＝ 2018 年の龍馬脱藩祭で

たまたま、自分は次男坊だ。家督を相続する身分ではない。もっと自由にと思う心が脱藩という大業を決断させた。土佐勤王党の同志たちは怒った。「龍馬をたたき殺せ」と。しかし、瑞山はかばった。「捨て置け、捨て置け、龍馬は土佐にあだたぬ男じゃ」。

ヒノキの精霊は、続けた。「それにしても、脱藩してからの 5 年間ぜよ。龍馬の回天の偉業はわずか脱藩からの 5 年の内ぜよ」。これからも語り続けたいかのように、幹は大きくよじれている。

龍馬を慕う私たちは、このヒノキのご神木にそっと寄り添って、聞き耳を立ててみよう。

第13回 高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会 研究発表会
テーマ「龍馬の思想と行動」

●日時　**2021年5月22日（土）10:00～17:20（会員総会9:20～）**
●会場　高知県立坂本龍馬記念館 新館ホール
●定員　50名（参加無料・要申込）

《研究発表》
10:10～ **網屋 喜行** 氏（鹿児島県立短期大学名誉教授（「吉田」本家末裔）
「石尾芳久氏の『海南政典』研究と分析道具のウェーバー『官僚制論』」

11:10～ **山本 修** 氏（株式会社便利堂 コロタイプ研究所所長）
「コロタイプ技術で龍馬の手紙を複製する ～100年以上前から続く古い写真印刷技術の話～」

《特別講演》
13:30～ **大石 学** 氏（日本芸術文化振興会 監事）
「坂本龍馬の現代的意義」

《研究発表》
15:10～ **坂本 世津夫** 氏（国立大学法人愛媛大学 社会連携推進機構教授「地域連携コーディネーター」）
「明智光秀と龍馬」

16:10～ **前田 由紀枝** 氏（高知県立坂本龍馬記念館 学芸課長）
「『新葉和歌集』を手がかりに龍馬の思想と歌心を考える」

※参加ご希望の方は現代龍馬学会事務局までお申込みください。
※状況により定員数の増減、また発表形式や時間・内容を変更する場合がございます。

【お申込み・お問い合わせ】
高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会事務局
電話 088-841-0001　FAX 088-841-0015
メール gendai-ryoma@kochi-bunkazaidan.or.jp

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会
〒 781-0262 高知市浦戸城山 830
TEL（088）841-0001　FAX（088）841-0015
mail:gendai-ryoma@kochi-bunkazaidan.or.jp